Think globally, Act locally

2019 Thailand

9.1-9.7

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム　実施報告書

ACCU　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

バンコク都・カンチャナブリー県

2019 年 9 月 1 日(日) ― 9 月 7 日(土)

公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日タイ・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

2015 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、国際連合大学の委託を受けて、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、新たに「タイ教職員招へいプログラム」が始まり、毎年タイ教職員 15 名を本邦に招へいしています。また 2018 年度からは、新たにタイ政府による日本教職員の招へいプログラムが開始され、2019 年 9 月までに計 12 名の教職員と 4 名の随行者がタイを訪問しました。

第 2 回となる今回のプログラムでは、首都バンコクに加えてカンチャナブリー県にも滞在しました。教育省や学校・教育文化施設等の訪問を通して、タイにおける教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、および両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、タイの教職員、児童生徒と交流しました。このたびの訪問が、タイの教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日タイの教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つことを願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、タイ教育省、文部科学省、訪問先の各学校をはじめとした関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2020 年 1 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

１．プログラム概要‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥3

２．実施内容・訪問記録‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥13

３．成果と今後への活用‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥25

付録　プログラム写真‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥37

過去のプログラム実績‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥44

１．プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う子どもたちを育む「教職員」を対象とした国際交流事業を日本政府の協力のもと 2001 年より開始し、これまでに日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で、4 千人を超える海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。その結果、教職員の学びが数多くの生徒・教職員・地域住民に還元されるほか、当事業をきっかけに多くの学校間の国際交流が生まれ、各国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

初等中等教育にかかる日タイ間の交流事業は、2015 年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年 15 名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童・生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017 年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、2018 年に「第 1 回タイ政府日本教職員招へいプログラム」が実施され、5 名の日本教職員がタイを訪問することにより、日本側・タイ側の念願であった双方向での交流事業が開始されました。2019 年度においても、タイ教育省協力のもと、文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」の一環として、7 名の教職員が下記の要項に基づきタイを訪問します。

2. 目的

本プログラムの目的は、下記３．に記されているプログラム期間中の活動およびプログラム前後の情報交換、交流活動等を通して日タイの教職員が相手国に対する理解を深めるとともにお互いに学び合い、相互理解と友好を促進することです。

所属機関の代表として本プログラムに参加する教職員は、プログラムを通して得た経験や学びを児童生徒・教職員・地域住民等に広げ、持続可能な開発のための教育（ESD）や地球市民教育（GCED）を含む国際理解・国際交流を推進する担い手となることが期待されています。

プログラムを通して交流する訪問先の教職員や児童生徒はもとより、参加者間でもネットワークを構築・交流を継続することで、ともに上記の目的を達成することを目指します。

3. 活動内容

(1) 学校等の教育施設の訪問（授業見学、教職員・児童生徒との交流、「足るを知る経済の哲学」および「家庭科」教育に関する好事例の視察等）
(2) タイの教職員および児童生徒との教育現場での交流・意見交換
(3) 教育・文化施設の視察

4. 日程

出発前オリエンテーション：2019 年 8 月 31 日（土）
プログラム実施期間：2019 年 9 月 1 日（日）‐9 月 7 日（土）　（7 日間）

日付	日程	訪問先	活動
8 月 31 日（土）	前日（午後）	成田空港近辺	出発前オリエンテーション
9 月 1 日（日）	派遣第 1 日目	バンコク	東京（成田）出発、バンコク到着
9 月 2 日（月） ｜ 9 月 6 日（金）	派遣第 2 日目 ｜ 派遣第 6 日目	バンコク カンチャナブリー県 バンコク	タイ教育省表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学
9 月 7 日（土）	派遣第 7 日目		バンコク出発 東京（成田）到着

5．参加者

下記の教職員、随行員、計 9 名の参加とする。

(1) 2019 年度タイ教職員招へいプログラムの受入れ教育委員会が推薦する職員 1 名
(2) 公募により選抜された、日タイ間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員 6 名
(3) 文部科学省、ACCU の職員各 1 名

6．参加資格

(1) 日本国籍を有すること。
(2) 過去に本プログラムに参加したことがないこと。
(3) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。(団長についてはこの限りではない)
(4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
(5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
(6) プログラム期間中の学びを帰国後に児童生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
(7) 将来にわたりタイとの教育交流の推進に寄与できること。特に、タイとの学校／教員／児童生徒／地域間の交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
(8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。
(9) 訪問先が日本とは習慣の異なる国であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
(10) E メールを用いて円滑に連絡ができ、また Microsoft Word／Excel を用いて所定フォーマットに必要情報を入力し提出できること。
※参加決定後は、参加者本人と直接連絡を取らせていただきます。
(11) 日常会話レベルの英語能力を有すること。

7．評価と報告

参加者は帰国後、所定の様式により ACCU に報告書を提出する。報告書は、ACCU 編集の実施報告書に掲載する。
第 1 回参加者報告書提出期限：2019 年 10 月 7 日（月）正午
※主にプログラム中の成果について報告
第 2 回参加者報告書提出期限：2020 年 2 月 7 日（金）正午
※主に帰国後の取組やその成果について報告

８．渡航費等諸経費

(1) タイ政府が下記について負担する。
往復航空運賃（日本（東京）とタイ（バンコク）の国際空港間のエコノミークラス航空券）
タイ国内の移動に要する交通費
タイ滞在中の宿泊、食事

(2) ACCU が下記について負担する。
日本国内交通費：自宅からオリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の羽田/成田空港からの自宅までの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
オリエンテーション当日（8 月 31 日）の宿泊費
注 1：オリエンテーション当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日（8 月 30 日）の宿泊費を支給する。
注 2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日（9 月 7 日）の宿泊費を支給する。
注 3：本プログラムは所属機関を代表し、基本的に公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先にて負担する。期間を通して ACCU から日当は支給されない。

(3) 各参加者の負担
海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
上記（1)、(2）以外の諸経費

(4) 旅券と査証について
旅券（パスポート）：入国時に 6 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
査証（ビザ）：ビザの取得は不要。

９．現地での使用言語

タイでのプログラムは、基本的に英語で運営される予定（必要に応じ、タイ語⇔日本語の通訳が入る予定)。

１０．情報管理・その他

以下に関して、あらかじめ了承した上で参加申請すること。

- オリエンテーションやプログラム期間中に撮影された写真等は、文部科学省、ACCU、タイ教育省の作成する資料やホームページなどの紙・電子媒体で、随時使用、掲示・掲載される。
- 参加者から提出される申請書類にある情報は、プログラム準備・運営のため、必要に応じて、文部科学省、在タイ日本国大使館、タイ教育省、在京タイ大使館に共有される。
※情報は厳重に取り扱われ、本プログラム運営以外の目的で使用されることはございません。
- 本事業への参加後に、アンケート調査への協力依頼がなされる。

プログラム日程

日程	時間	内容	宿泊
8/31(土)	13:30-13:50	オリエンテーション受付	成田エアポート レストハウス
	14:00-18:00	オリエンテーション	
	18:00	ホテルチェックイン、夕食	
9/1(日)	10:50	成田国際空港発（TG641）	デプライム@ ランナムホテル バンコク
	15:20	スワンナプーム空港到着	
	16:00	ホテルに移動	
	17:30	ホテル到着、チェックイン	
	18:00	夕食	
9/2(月)	07:30	ホテル出発	
	08:00-10:30	ウドムスクサー学校訪問	
	12:00-13:00	王宮観光	
	13:15-14:15	昼食	
	14:50-15:15	教育副長官への表敬訪問	
	15:20-16:15	タイの教育制度の紹介と質疑応答	
	16:15-17:00	教育省内のミュージアム見学	
	18:00	夕食	
9/3(火)	09:00	チェックアウト、ホテル出発	カノカンホテル カンチャナブリー
	12:00	昼食	
	14:00-17:30	チャロームプラギアットソムデットプラシーナカリン皇太后カンチャナブリー学校訪問	
	18:00	ホテルチェックイン、夕食	
	19:40-20:40	ナイトマーケット見学	
9/4(水)	09:00	ホテル出発	
	09:30-12:00	ノンカオコウィッピタヤコム学校訪問	
	12:00	昼食	
	13:30-14:30	学校の先生と交流	
	15:30-17:00	クワイ川鉄橋を訪問	
	18:00	夕食	
9/5(木)	08:30	チェックアウト、ホテル出発	リバークワイパラダイスホテル
	09:00-10:00	Wat Tham Suea（寺院）見学	
	12:00	昼食	
	13:30-18:30	ソムデジ・プラ・ピヤ・マハラジ・ロマネヤケート学校訪問	
	19:00	ホテルチェックイン、夕食	

9/6(金)	09:00	チェックアウト、ホテル出発	デプライム@ ランナムホテル バンコク
	13:50	ホテル到着、昼食	
	15:00-17:00	タイ国教育省でのプログラム評価会議	
	18:45-21:00	MBK センターにて夕食、自由時間	
	22:00	ホテル到着	
9/7(土)	04:00	チェックアウト、ホテル出発	
	07:35	スワンナプーム国際空港発（TG676）	
	15:45	成田国際空港到着	

【オリエンテーション講師】

文部科学省 国立教育政策研究所　国際研究・協力部
総括研究官　沼野　太郎

Ms. Kuntigar Patcharachanon
Programme Officer, Bureau of International Cooperation, Ministry of Education of Thailand

参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	担当係
01	浅野　智宏	岡山市立三勲小学校	教諭	団長
02	新垣　まどか	和歌山市立河北中学校	教諭	文化交流
03	池野　絵美	横浜市立上菅田特別支援学校	教諭	交流授業
04	佐藤　理恵	宮城県気仙沼市立松岩小学校	主幹教諭	情報共有
05	東郷　尚子	学校法人新庄学園新庄東高等学校	教諭	文化交流
06	富樫　未来	徳島県上板町立高志小学校	教諭	写真
07	山本　咲希	神奈川県立相模田名高等学校	教諭	交流授業
08	米岡　亜依子	文部科学省大臣官房国際課	海外協力政策係長	
09	高松　彩乃	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部	プログラム・ スペシャリスト	

プログラム関係機関

＜日本側機関＞

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT)

＜タイ側機関＞

タイ教育省/Ministry of Education, Thailand

＜訪問校＞

ウドムスクサー学校/Udomsuksa School（バンコク）

チャロームプラギアットソムデットプラシーナカリン皇太后カンチャナブリー学校
/Srinagarindra The Princess Mother School Under Patronage of Princess Maha Chakri Sirinthorn
（カンチャナブリー）

ノンカオコウィッピタヤコム学校/Nongkhaokowitpitthayakom School（カンチャナブリー）

ソムデジ・プラ・ピヤ・マハラジ・ロマネヤケート学校/
Somdej Phra Piya Maharaj Rommaneeyakhet School（カンチャナブリー）

＜企画・実施・運営＞

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

２．実施内容・訪問記録

８月３１日（土）午後　オリエンテーション（成田市）

オリエンテーションの様子

プログラムの前日、成田エアポートレストハウスにてプログラムのオリエンテーションが実施された。

代表者の挨拶の後、文部科学省国立教育政策研究所 国際研究･協力部 総括研究官 沼野太郎氏よりタイの教育について講義が行われ、参加者がタイの教育概要と近年の教育改革等について学ぶ機会となった。

その後、ACCU 職員による日程の説明や同時期にタイ教育省の研修により来日中であった Ms. Kuntigar Patcharachanon によるタイ語講座、関心のあるトピックについての意見交換などを通して参加者同士が互いに知り合い、翌日から始まるプログラムの準備を行った。

プログラム参加者の興味・関心

・ICT の活用状況
・教育格差について
・特別支援教育について
・教員養成課程について
・教育課程編成における学校の裁量
・教育課程の中での ESD や GCED の扱い
・多様な民族が共存する環境での教育方針
・学習評価について
・国際社会を意識した教育がどう実施されているか
・学校と保護者や地域との関係について
・教職員の研修について
・外国語教育について　等

９月１日（日）日本出国・バンコク到着

９月１日（日）に日本を出発した訪問団は、成田国際空港を出発し、同日夕方にスワンナプーム空港に到着した。その後、バンコク市内のホテルに到着し、食事をとりながらタイ教育省よりプログラムに関する簡単な説明を受けた。

9 月 2 日（月）午前①　ウドムスクサー学校訪問

訪問スケジュール

時間	内容
8:00-8:35	歓迎セレモニー 挨拶・学校紹介
8:35-8:45	伝統舞踊・伝統楽器による歓迎
8:45-9:30	小学生の伝統工芸実演・体験
9:30-10:20	授業・校内見学
10:20-10:30	集合写真撮影、見送り

国旗を振って出迎えてくれた
子どもたちと一緒に

学校・機関の特色

幼稚園から高校までの一貫校で「自分の夢を叶えるための学校」というコンセプトで、グローバル化する社会やテクノロジーの変化に対応できる人材作りに力を入れている。見学した中では、小学校低学年から英語のみを使って進めている授業や、理科や数学に力を入れ、幼稚園から昆虫の一生や植物の栽培を体験的に学ぶ学習プログラムを設け、子供が楽しめる学習を進めている様子、ボーイスカウトのプログラムを取り入れた教育活動を見て取ることができた。

伝統文化について

・近代的な伝統舞踊である「ラータイ」と、中学生による伝統楽器の演奏を鑑賞した。
・伝統工芸の実演・体験ブースでは、小学生と教員に教えてもらいながら、野菜のカービング・フラワーアレンジメント・アロマを使ったうちわ作りに挑戦した。

参加者の感想（抜粋）

・授業視察では、校舎内の掲示物が豊富なことや施設が充実していることを十分に感じた。
・タイの伝統文化を受け継ぐこと、環境との共生を図ること、英語教育の重視など、社会の変化が大きい現代において、グローバルな学びとタイ国の特質を生かした教育がなされていることに共感した。
・「足るを知る経済の哲学」の理念を 1 つ目の学校訪問から感じ取ることができた。

９月２日（月）午前②　王宮視察

概要・特色

タイ、バンコクの象徴であり、最も有名な観光地のひとつでもある王宮を観光した。ここにはタイの国王が暮らした王宮や歴代の国王の遺骨が納められる宮殿、迎賓館などがある他、タイで信仰されている独自の仏教において最も重要な仏像を本尊とした寺院(ワット・プラケオ)が建立されている。タイの国王を大切にする心や仏教に対する姿勢などタイの文化を知るには欠かすことのできない観光地である。

王宮では、係員の女性から一つひとつの建造物について非常に丁寧な説明を受けた。タイのみならず外国の建築様式で建てられた塔が同じような大きさで横に並んで建てられている様子に、多様性に寛容な文化の一端を感じ取った。

９月２日（月）午後　タイ教育省表敬訪問

訪問スケジュール

時間	内容
14:50-15:15	Ms. Duriya Amatavivat (Deputy Permanente Secretary for Education)表敬、挨拶
15:20-16:15	タイの教育制度に関する講義・質疑応答
16:15-17:00	教育省内のミュージアム見学

Ms. Duriya Amatavivat 表敬訪問

Q&A（抜粋）

Q：午前中に訪問したウドムスクサー学校（私立）で、車いすを利用している子や病気の子も一緒に学校生活を送っている様子を見た。日本では、私立学校ではそうした環境は稀である。障害を持った子が、教育制度の中でどのように位置づけられているか。

A：特別支援教育については、特別支援教育局で管轄している。障害の種類は様々だが、一般の学校に通える程度のものであれば、通えるようなサポートがある。難しい部分もあるが、子どもたちにチャンスを与えたい。通うことが難しければ、特別支援学校という選択肢もある。

Q：インクルーシブ教育に関してどのような取り組みがあるか。

A：インクルーシブ教育の強化は、ASEAN の方針の一つでもあり、タイとしても考えていることである。障害を持つ人々だけでなく、教育の機会に恵まれない人々のための教育にも取り組んでいる。「均等性」のキーワードで、法律の中で言及されている。

Q：ASEAN の地域内で、児童・生徒同士の交流は活発にあるのか。

A：交流の度合いは学校にもよるが、校内に ASEAN コーナーのようなものを設け、隣国について学ぶ取り組みをしている学校は多い。

９月３日（火）午後　チャロームプラギアットソムデット プラシーナカリン皇太后カンチャナブリー学校訪問

訪問スケジュール

時間	内容
14:00-14:30	歓迎のパフォーマンス、挨拶、学校説明
14:30-15:00	植物園プロジェクトの紹介
15:00-15:30	生徒によるタイ文化紹介
15:40-16:30	日本教職員による授業
16:40-17:30	質疑応答

生徒によるタイ文化紹介

学校・機関の特色

同校はタイ教育省による、シーナカリン皇太后学校を設立する計画により設立された学校の１つで、前国王の母親にあたるシーナカリン皇太后の名を冠した学校として 1996 年に開校した大規模中等教育学校である。カンチャナブリー県では数少ない、第二外国語で日本語を学ぶことのできる学校である。自宅から通学する生徒と寄宿舎で暮らす生徒を合わせて、1,300 名の生徒が在籍している。王室の支援により、タイの植物を守ることや、学生への自然への意識を高めることを目的とした「植物園プロジェクト」を行っている。教科横断型で、数学では木の高さの測定、英語では特産品を使ったレシピを英語で紹介する作品作りなど様々な教科の学習に生かしている。

伝統文化について

・学校の先生が指導しているという伝統舞踊クラブの生徒によるパフォーマンスを鑑賞した。
・生徒による伝統文化紹介では、屋台で売っているような伝統的なお菓子と、植物で作るおもちゃ作りなどを体験した。

Q&A（抜粋）

Q：生徒が日本語を学ぶきっかけとなっているのは何か。
A：アニメが一番多い。日本語のほかに中国語、フランス語が選べるが、どちらも難しいイメージがあり、アニメなどを通して日本に親しみやすさを感じている生徒が選んでいるようだ。
Q：授業研究のような話し合いを行うことはあるか。
A：Professional Learning Community という研修のような会議を、教科ごとに行っている。反省会と意見交換を行い、カリキュラムの評価に役立てている。
Q：伝統文化のカリキュラムについて知りたい。
A：タイでは小学校から伝統文化がカリキュラムに入っており、中学以降も続ける生徒が比較的多い。授業に含まれていることが、子どもたちがタイの楽器や舞踊などに関心をもつきっかけになっている。

９月４日（水）午前　ノンカオコウィッピタヤコム学校訪問

訪問スケジュール

時間	内容
9:20-9:30	外で歓迎のパフォーマンス
9:30-10:30	歓迎会、挨拶、学校紹介
10:30-11:10	意見交換
11:20-12:20	家庭科の授業、伝統文化の選択授業見学

地域の伝統文化である布を織る授業での体験

学校・機関の特色

同校は農業地帯に位置する公立の中等教育学校で、大きな道路ができて中心部へのアクセスが良くなってから、生徒が減少傾向にあるという課題を抱えながらも、教育委員会や地域と力を合わせて運営を行っている。前国王のラーマ９世が提唱した「足るを知る経済の哲学」を取り入れてカリキュラムを編成している。職業教育に力を入れており、地域の伝統文化である機織りがその一つである。

伝統文化について

・歓迎のパフォーマンスとして、伝統衣装を身に着けて楽器演奏と舞踊を行ってくれた。
・機織りの授業で織られた布は、家庭科の授業でもキーホルダーやミニバッグ作りに使われていた。生徒が直接織ったストールが訪問団全員にプレゼントされた。

Q&A（抜粋）

Q：この学校の伝統文化教育について教えてほしい。
A：ミャンマーとの国境にほど近く、文化も混ざり合っている。タイの文化というよりも地域の文化を、学校で教えなければなくなってしまうという観点から選択している。卒業後は進学だけでなく就職する生徒もいるので、手に職をつけて生活できるよう、仕事に結びつくものとして教えているものもある。
Q：行政・地域と学校との協力体制について知りたい。
A：教育委員会が大きなビジョンを設定し、それに基づいて各学校がカリキュラムを編成している。保護者、お寺、町の人々からのサポートを受けて運営している。教育委員会から年間のビジョンが示され、学校からその結果を報告し、課題を話し合って次年度のビジョンに反映される仕組み。
Q：国境付近とのことだが、外国出身の生徒も通っているか。
A：今はいないが、以前はミャンマーの生徒や、タイとミャンマー両方のルーツを持つ生徒が通っていた。国籍が異なっても同じように無償である。ミャンマーの場合、タイに出稼ぎに来ている親の子どもが多く、大きくなると国に戻るため、中学校以降よりも小学校の方が多い。

９月４日（水）午後　クワイ川の橋見学

概要・特色

第二次世界大戦中、日本軍が敷設した泰緬鉄道が通るクワイ川にかかる鉄橋。映画『戦場に架ける橋』の舞台としても知られている。現在の姿は戦後修復されたものだが、アーチ部分はオリジナルのまま残っている。対岸まで歩いて渡ることができる。橋の近くには「JEATH 戦争博物館」があり、泰緬鉄道の建設に携わった日本軍捕虜収容所の様子が再現されている。

「戦場に架ける橋」の前で

参加者の感想（抜粋）

・お互いの国の歴史を知ることは友好関係を築く上でとても大事だと感じた。
アジアの中での日本の歴史的な立場はデリケートなものであると思うが、それをどうとらえ、未来につなげていくかが大事だと感じさせてもらえた見学であった。また、そういった歴史背景を持ちながらも、タイの人々が日本に対して友好的であることを知ると、さらに日本人としてタイと友好関係を持続させていきたいという好意が生まれるとも感じた。こういったことが国際平和の基本となるのかもしれないと感じた。「forgive, but never forget」という言葉が刻まれていたが、その言葉の意味と重みを考えられる教育を行っていきたいと思った。
学校の様子だけでなく、タイの国を知るという意味でとてもありがたいプログラムであった。
・かつて戦場だったこの場所に日本軍がいたことを改めて認識し、タイの平和教育に関心を持った。通訳の方に、タイでの「戦争」の学び方を伺うと、「学ばない」との答えだった。個人の見解としては、タイ全体で日本への印象も悪くなく、戦争に巻き込まれたという認識も弱いという。より一層、タイの人たちが描く「平和」とはどのようなものなのか関心を持つ会話となった。また、日本人として、日タイの歴史的関わりへの知識不足を痛感した。世界史を学んでいる生徒たちと話題にしていく予定である。

９月５日（木）午後　ソムデジ・プラ・ピヤ・マハラジ・ロマネヤケート学校訪問

訪問スケジュール

時間	内容
13:30-14:00	歓迎行事、挨拶
14:00-16:30	校内見学・歓迎パフォーマンス鑑賞
16:45-18:30	意見交換、記念品贈呈

臨場感のある仮面舞踊

学校・機関の特色

教育の機会に恵まれない子どものための学校（小学校 4 年から高校 3 年まで）である。全寮制の学校で、学問のみならずライフスキルの習得を大きな目標としている。教員が児童・生徒の家族のような役割を担っており、他の学校の教員と比べても非常に忙しい。SDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けて、タイの人々にとって身近な概念である「足るを知る経済の哲学」と関連づけて、学校農園における学習活動を充実させている。学校内でお金を預かる「スクールバンク」を、農業銀行とのコラボレーションで運営している。

伝統文化について

・部活動で取り組んでいるという古典舞踊、仮面舞踊、伝統楽器の演奏を鑑賞した。
・学校農園で育てたバナナを使って子どもたちが作った数種類のお菓子をいただいた。

Q&A（抜粋）

Q：伝統文化を学ぶ意義とは。
A：自分たちの取り組んでいることがいいことだと気づくには、外の世界に行くことが大切。だから何度も人前で披露し、自信を身に着ける機会を繰り返す。踊りを担当する教員もこの学校の卒業生。踊りの専門を学んで教員になっている。
Q：教員たちの目標を共有する等、リーダーシップの面で工夫している点を教えてほしい。
A：すべての児童・生徒に対応できる方法である必要がある。基準となるマナーや姿勢を大切にしている。一人のリーダーシップには限界があるため、助け合いを大切にしている。子ども同士も、先輩・後輩と助け合うことを学び、それが地域コミュニティに広がっている。また、この学校はお坊さんが建てた学校であり、仏教の考え方も子どもたちに伝えている。「よい人格を身に付ければ、後から学力はついてくる」ということを信じている。
Q：多様な家庭背景を持った子どもたちが幼いうちから一緒に生活する上での工夫は。
A：学校ではなく家という設定。先生ではなくお父さん、お母さんと思ってくださいと伝えている。児童・生徒は離婚家庭が 8 割で、家庭の事情は様々だが、同じ愛情で同じことをすることを大切にしている。

9月6日（金）午後　タイ国教育省でのプログラム評価会議

概要

バンコクおよびカンチャナブリー県での日程を終え、教育省にて参加者全員がプログラムからの気付きや学びを共有する時間を持った。

教育省の Somsong Ngamwong 氏を囲んで記念撮影

プログラム評価会議でのコメント・提案（抜粋）

・「よい人格を身に付ければ、後から学力はついてくる」 という話が印象的であった。日本では学力につながるかどうかの視点になりがちかもしれないと。伝統文化を学ぶ意義を各学校で伺ったが、その一つの答えがそこにあると思えた。
・学校訪問を通して、足るを知る経済の哲学と ESD の理念に共通点があると感じた。循環社会型で生徒が主体となるプログラムを作り上げていたことに感動した。
・2018 年度に日本を訪問したタイの先生方が数名集まり、再会できたことは非常に感動的であり、ネットワークづくりの上でも次につながるものとなった。
・社会に出たときにどうなるかということを常に想像しながら教育をしていると感じた。
・学校内に、ベンチやテーブルなどコミュニケーションが取れる場がたくさん見られた。日本に帰った後、コミュニケーションが取れる場所を作りたい。
・子どもたちが自国に高い関心を持っており、それが他国にも高い関心を持つことにつながっていると感じた。
・多様なバックグラウンドを持つ子ども、特にタイ国籍を持たない子どもに対する教育が保証されている点には学ぶことが多かった。
・小規模なグループで意見交換ができる機会があると、より交流が深まったと思う。
・STEAM 教育の実践事例を見てみたい。
・たくさんタイのことを紹介してもらったが、せっかく日本の教職員が訪問したので、こちらから日本のことを紹介する機会ももっとあってもよかった。

３．成果と今後への活用

A-01　浅野　智宏

（岡山市立三勲小学校・教諭）

（写真中央）

「伝統文化を通じて心を育てる」

今回のプログラムで印象に残ったのは「良い人格になると自然に学力はついてくる」という言葉だ。伝統文化を通じて心を育てるという強い願いを感じた。また他国との国境を有する多民族国家という背景の中で、タイ国民としてのアイデンティティを育てるために伝統文化を学ぶ一面もあるという。

本校では、伝統文化の「能」を学び、今までも伝統文化を通じて何を育てるのかということは考えてきた。しかし、このタイ訪問をきっかけに、伝統文化を通じて日本人としてのアイデンティティを育てることは、グローバル化が進む今、国際人としてより重要な要素になると考えることができた。

今回タイについて学び、多くの方とつながりを構築することができた。これをしっかり子ども達に還元し、子ども達にもタイの多くの文化や考え方に触れさせたい。自分たちの文化について学びを深め、日本人としてのアイデンティティを大切にした真の国際人となってほしいと思う。

「良い人格になると自然に学力はついてくる」この言葉を胸に、今後も伝統文化教育、国際理解教育を通じて子ども達の心を育てていきたい。

今後の活動予定

〇タイの紹介（成果発表）

・校内研修会で本プログラムの内容と成果を発表する。

・児童集会で全児童にタイについて紹介する。

・国際理解教育の視点でタイをテーマに授業（総合的な学習、外国語活動）を実施する。

〇タイの学校と交流をする。

・今回つながりを得た方々を通じて、タイの小学校と交流を進める。

〇タイの伝統文化教育について学ぶ。

・本プログラムで知ったタイの伝統文化教育について、さらに文献やつながることができた方々に直接質問するなどの方法を使って研究し、勤務校で取り組んでいる伝統文化教育の推進に活かす。

〇実践発表

・岡山県国際理解教育研究会・県大会や各研究会にて本プラグラムと帰国後の実践について発表し、岡山県内の国際理解教育、ESD に関わる教員に成果を広める。

A-02　新垣　まどか

（和歌山市立河北中学校・教諭）

（写真中央）

「プログラムでの成果」

このプログラムを通し、学校訪問をはじめタイで学び得たものは多くありました。

１つ目は、日本を離れタイでの教育現場を訪問できた事が教師として非常に刺激になったことです。国内でも研修会等は行われていますが、日本という枠を飛び越えて教育現場を視察できたことから多くを学びました。日本とタイではカリキュラムの違いなどは色々ありましたが、教育に力を入れている点では、似ている部分もあると感じました。様々な学校を訪問させて頂き、子供達にとって教育とは必要なものであることを再確認できたことが良かったです。それと同時に、教育とはその国の文化も担っていることに気づくことができました。今後の社会を担う子供達を育てていくという、国の将来を創造していく大きな責任が私たち教師にはあることを実感しました。

２つ目は、外部との交流を積極的に行うことです。タイでは様々な文化を体験させて頂きました。その中で学ぶことも多く、新たな発見や日頃では気づけない点にも気づかされました。知らない事を知ることや、実際に自身で触れることで得られる学びが多くあったと感じています。日本は島国ということもあり、自らが積極的に外部との交流を行っていかなければ、良くも悪くも独立してしまうと感じています。このプログラムを通して、子供達にも視野を広げることの意味や大切さを伝えていきたいと強く思いました。また、私自身が新たな世界を開拓することが、教師としても必要だと改めて感じるプログラムでした。

今回の研修は、私の人生を大きく変えてくれるきっかけとなる研修であったことは間違いありません。これを機に、教師としても人間としても成長出来るように努めていきたいです。

今後の活動予定

（１）学校や教育委員会において

担当授業でタイ文化や研修の報告を生徒向けに行う。

タイでは伝統舞踊をカリキュラムとして取り入れていた事を活かし、体育の授業で母国の伝統舞踊や地域の踊りなどを取り入れてく予定。

（２）その他（地域コミュニティーなど）において

体操競技で関わりのある子供たちにも、視野を広げてもらえるようにアプローチしていく。私自身も、グローバルな視点から、指導できるように SNS や実際に海外に行き勉強を継続していく。

A-03　池野　絵美

（横浜市立上菅田特別支援学校・教諭）

（写真右）

「タイでの出会いを振り返って」

バンコク、カンチャナブリーで４校の学校に訪問させていただき、タイの子どもたちに出会うことができ、有意義な学びの機会を得ることができたことを嬉しく思います。いずれの学校でも、子どもたちの笑顔が印象的で、また、日本への関心の高さも感じられました。異なる文化との出会いは、ときに不安もあるかもしれませんが、お互いについて伝え合い理解を深められたときの喜びは、かけがえのないものであると改めて思いました。タイでの学びを、日本の子どもたちの出会いや学びにつなげていきたいです。

また、タイの教員や教育省の職員の方々と、インクルーシブ教育や特別支援教育について意見を交わせたことも、とても有意義な機会となりました。タイは、ユネスコメンバーとして、またアセアンメンバーとして、障害や国籍の有無、家庭の労働環境等に関わらず、地域の学校で教育を受ける機会を保障していくことを目指している、という話を伺うことができました。同時に、学校現場では、日本と共通する課題に悩んでいたり、工夫して取り組んだりしていることも知ることができました。これからもお互いに交流を続け、自分にとっては当たり前になっていることを振り返り、学び合いたいと思います。コップン・カー！

今後の活動予定

（１）学校や教育委員会において

今年度は中学部の生活（社会、理科、技術・家庭を合わせた指導）を担当しているので、生活の授業で、タイ文化や日本文化に関する体験的な学習に取り組んでいます。教材として、今回のプログラムで得た写真や動画、民族衣装、植物を活用する予定です。またプログラムを通じて４校のタイの教員とつながりができたので、積極的に生かし、授業で相互の交流の機会を持てればと思っています。

また、校内研修等を通じて、ESD を念頭に報告を行う予定です。横浜市はユネスコスクールに登録されている特別支援学校はないため、身近なところから関心を広めたいです。将来的にタイの教職員の方々に横浜市に訪問していただけるよう教育委員会にも働きかけたいと思います。

（２）その他（地域コミュニティーなど）において

地域の教育をテーマに活動している団体（障害当事者、保護者、教員などが参加している）で、タイの教育制度や現場の取り組みについて報告を計画しています。

A-04　佐藤　理恵

（宮城県気仙沼市立松岩小学校
主幹教諭）

（写真左から二人目）

「多様性と固有性の共存　アメージング・タイランド」

国境のない日本から、幾多の国境をもつタイを視察できたことは、私にとって、深い学びとなった。礼儀正しさや相手を思いやる心といった道徳性を醸成させ、伝統を重んじながらタイ人としてのアイデンティティを確立させると共に、国際人としての教養も養い、多様な文化を受け入れつつ、世界を見据え、グローバル社会を創造する人材を育成しようとする教育の在り方に深い感銘を受けた。グローバル社会を「生きぬく力」を育成する教育について、大変素晴らしい事例を視察できた。

ところで、私は、SDGs に対するタイの環境教育に興味があり、今回のプログラムに参加した。今回、4 校の全ての学校から、自然との共生や物を大切に使う姿勢を児童や生徒の行動を通して、理解することができた。その陰に、教師が協働し、毎日の授業評価を行い、カリキュラム開発を行っているという努力があることに教育者としてのプロ意識を感じた。また、環境教育ばかりではなく、「質の高い教育をみんなに」という SDGs の 4 番目の目標に沿う「教育の機会に恵まれない子どものための学校」の設立や無国籍の児童・生徒を受け入れ、教育を行うタイの教育制度にも大変感動した。

今後の活動予定

（1）学校や教育委員会において
・タイの文化紹介（全校朝会）
・タイのお菓子づくりを通した国際理解（6 年家庭科）
・SDGs を踏まえた環境教育（海洋教育）の推進（総合学習におけるプログラム作りと実践）
（2）その他（地域コミュニティーなど）において
・学校だよりや学校 HP を活用したタイの文化紹介
・地方紙へのタイ交流に関する寄稿

A-05　東郷　尚子

（学校法人新庄学園新庄東高等学校・教諭）

（写真左）

「しっかりと根を張り、未来へと歩む子供たち」

どの学校も、去るのが名残惜しい程、充実した時間を過ごさせていただいた。温かいおもてなしと、学ぶことの多いタイの先生方の言葉、そして生徒たちの笑顔を思い返すだけで充実した時間と感謝の気持ちがよみがえってくる。タイも日本も描く未来に共通点は多い。地球規模の課題から、生徒ひとり一人に合った教育まで、チーム一丸となって取り組むタイの先生方の姿にとても励まされた。そして、多様性とイノベーションによる変化の激しい現代から未来に向けて、学校が果たす役割とは何なのかを改めて考える機会となった。現場の先生方が抱えている課題も教師としてのやりがいにも国境はない。国は違えど同じ使命を持った方々と出会えたこととが一番の収穫である。タイの伝統文化教育は子供たちの自分自身への愛情を育んでいる。タイの学校教育における伝統文化の継承と未来を見据えた教育のバランスからは多くを学んだ。私も一人の教員として、自身を取り巻く環境や文化に愛情を持ち、「出会う」ことを恐れない生徒を育てていきたいと思う。

今後の活動予定

（１）学校において

授業を通して生徒と共有し、探究活動や学校行事等でも活用していきたい。

9/20　生徒（３年世界史Ｂ選択者）への活動報告

9/27　本校教員への活動報告

9/24　生徒（１年世界史Ａ授業）への活動報告

9/26　生徒（２年世界史Ｂ選択者）への活動報告　　以降は随時実施

（２）その他（地域コミュニティーなど）において

・オープンスクールの際の、地元の中学生に対するワークショップ

・地元の方や保護者と取り組むフォーラムの際の話題提供

A-06 富樫　未来

（徳島県上板町立高志小学校・教諭）

（写真前列右から二人目）

「微笑みの国から教えてもらったこと」

私の周りのタイに行ったことがある人は全員、とても素晴らしい国であり、何回でも行ってみたくなる国だと言っていた。そのため、タイを訪問する前から私の気持ちは、わくわくでいっぱいだった。実際に訪れて、確かに、「何度でも行ってみたい！！」と思った。訪れた学校では、外国から来た私たちをすばらしい「おもてなし」で迎えてくれた。相手を喜ばせたいというタイの人達の気持ちがひしひしと伝わってきて、嬉しかった。また、伝統文化に誇りを持っており、日本の子どもたちにも、自国の伝統を大切にする気持ちを大切にしてほしいという気持ちが強くなった。伝統を守りながら、新しい文化を創っていく力が、これからを生きる子どもたちには必要となることを強く感じた。このプログラムは、他国を訪れた教職員だけでなく、迎えた教職員にとっても、これからの教育を考えさせる良い機会となると思われる。12 月にタイの教職員を迎える本校としても、全職員そして児童が海外からのお客様を迎えることによって、それぞれの学びに繋がる充実した時間となるよう、「おもてなし」の心で接していきたい。

今後の活動予定

（1）学校や教育委員会において

教育委員会には、お礼をかねて、学校訪問で学んできたことを口頭で報告した。ぜひ、他の教職員にも海外研修に行くきっかけを与えて欲しいことを伝えた。

学校では、9 月 26 日の校内研修において、プレゼンテーションソフトを用いて、タイ研修で私が感じたことを全教職員に伝えた。

本校は 12 月にタイの教職員が来校するので、そのときにどのようなことをすればお互いの研修になるのかということのヒントになるように、私が体験したことを写真や動画を用いて、報告させてもらった。全教職員で、日本とタイにおいてこれからの教育に繋がる時間を共有できるように計画していく。

（2）その他（地域コミュニティーなど）において

国際理解教育をこれまで以上に力を入れて進めていきたいと考える。実際に、11 月にはネパールからの留学生 4 名を 2 泊 3 日で受け入れる。そのときは、児童の家庭でホームステイを行う予定である。学校だけのつながりではなく、家庭を巻き込み、さらには地域にも広がるような実践ができるよう、学校の外との繋がりを広げていきたい。その際は、ホームページや SNS を上手に使いながら情報を得て、そして自分たちの取り組みを広げていく。

A-07　山本　咲希

（神奈川県立相模田名高等学校・教諭）

（写真右から二人目）

「敬意と危機感」

私は海外に行くことが多く、これまでの経験から母国日本に大きな愛情と誇りを持っている。しかし、このままでは日本は世界で取り残されてしまうのではないかという危機感を今回の訪問で感じた。

一例ではあるが、タイの学校では必修だが画一的ではない伝統文化継承教育を実践していた。素晴らしい伝統を持つ日本で、そのようなことが可能だろうか。たとえ可能だったとしても「どの学校でもやっている」伝統文化教育に終始してしまわないだろうか。タイの生徒たちは、交流授業で日本の文化にも大きな関心を寄せていた。自国の文化を大切にする心の醸成が他国の文化への敬意に繋がるのだろう。

タイの先生が「伝統を守りつつ未来を担う教育」と仰っていた。私は、今後も日本が国際社会の中で活躍できる国であってほしいと思い、教育がその根幹にあると信じている。今回の訪問で、日本と私たち教員が新時代の教育を模索し実践していく必要性を強く感じた。

今後の活動予定

（1）学校や教育委員会において

・英語の授業内で、日本の伝統文化を英語で学び、地域の小中学校と連携して高校生が英語で教えに行く。

・職員ミーティングの時間を設け、今回の実践報告を勤務校の教員に行う。理解が得られれば、コラボレーション教育を行う。例えば、料理同好会とコラボレーションをし、文化祭でタイの料理を発表したり、体育と TT で日本や海外の踊りを学んだり、ダンス部の発表にも取り入れられる工夫を提案する。

・英語の発表（使用）の機会を作る。今回の繋がりを大切にするため学校の Wi-Fi 環境を整え、タイの生徒との交流により、生徒の語学意識を高めたい。

・タイ―日本の交流の道筋を作る。生徒の委員会や活動組織を作り、ホームステイ環境などを整え、相互に行き来できるシステムを整えたい。また、タイの先生方を招いて職員の意識啓発を行う環境を整えていく。

（2）その他（地域コミュニティーなど）において

・地域に住むタイ国籍の方にお願いをし、講話かワークショップの形で国際理解教育の時間を設けたい。将来的には、タイ国籍だけではなく、地域の様々な国籍の方と協働で国際理解教育を推進したい。その際教員がファシリテーター及び TT の形で関わる。

・文化祭等で地域の方の力を借りながら情報提供の場を作る。委員会主導で行うことが望ましい。（長期的な活動にしていくため）

事業担当者コメント

今年度に 2 年目を迎えた本プログラムでは、昨年より 2 名多い 7 名の日本教職員がタイ政府からの招へいを受け、タイの教育現場を訪問しました。

本年は首都であるバンコクに加え、カンチャナブリー県に 3 日間滞在しながら多種多様な学校を訪問しました。どの訪問先でも、伝統文化のパフォーマンスや体験によるおもてなし、訪問団一人ひとりの質問に真剣に答えてくださる先生方のまなざし、限られた時間の中でも積極的に交流しようとする日タイの先生方の姿に心を動かされる 1 週間でした。

また、今回のプログラムでは、2018 年度の訪日団の一員であった方の学校が訪問先のひとつとなっていました（カンチャナブリー県のソムデジ・プラ・ピヤ・マハラジ・ロマネヤケート学校）が、そこに、当時の訪日団のうち 5 名もが集結したのです。それぞれの学校に許可を得て、日本の約 1.4 倍の面積を持つタイの各地から、ある人は 10 時間以上車を運転し、またある人は飛行機と列車を乗り継いで、私たち訪問団に会いに来てくれました。一度だけではなく二度会うことで交流の深さも意欲も増すということを、身をもって体験しました。

プログラムに参加された先生方が、この経験を様々な場所で活用され、広げていってくださることを期待しています。教職員の国際交流や異文化体験により、教職員自身の意識が変わること、そしてそれが子どもたちの変化へつながっていくよう、当センターもプログラムの発展に尽力して参ります。

最後になりますが、本プログラムの実施にご尽力いただきましたタイ教育省、訪問校をはじめとした関係機関の皆様に改めて感謝申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部　高松　彩乃

付録

タイ教育省表敬訪問

事前オリエンテーションの様子（日本）

スワンナプーム空港到着

タイ教育省表敬訪問

タイ王宮見学

学校訪問①（歓迎）

学校訪問①（伝統楽器の演奏）

学校訪問①（野菜のカービング）

学校訪問①（伝統衣装体験）

学校訪問①（ALT による英語の授業）

学校訪問①（幼稚園の子どもたちとラジオ体操）

学校訪問①（ボーイスカウト活動）

学校訪問①（記念品交換）

学校訪問②（伝統舞踊）

学校訪問②（校内見学）

学校訪問②（植物園プロジェクトの紹介）

学校訪問②（生徒によるタイ文化紹介）

学校訪問②（日本教職員の交流授業）

学校訪問②（日本教職員の交流授業）

学校訪問②（集合写真）

学校訪問③（歓迎パフォーマンス（踊りと楽器演奏））

学校訪問③（生徒が織ったストールの贈呈）

学校訪問③（家庭科の授業見学）

学校訪問③（機織りの部屋）

クワイ川に架かる橋の見学

JEATH 戦争博物館

Wat Tham Suea（寺院）見学

Wat Tham Suea（寺院）に向かう階段

学校訪問④（集合写真）

学校訪問④（歓迎行事）

学校訪問④（スクールバンク）

学校訪問④（施設見学）

学校訪問④（学校農園で育てたバナナのお菓子）

学校訪問④（仮面舞踊）

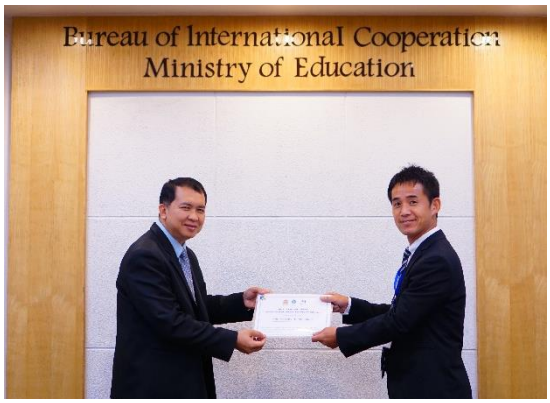
学校訪問④（本の読み聞かせグループの生徒たち）

学校訪問④（訪問団を見送る生徒たち）

学校訪問④（生徒たちに挨拶をする訪問団）

プログラム評価会

プログラム評価会



プログラム修了証の授与

バンコクでの食事

タイ教職員とのナイトマーケット散策

タイ教職員との交流ランチ

タイ教職員との交流

2018 年の訪日団と

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2018 年 8 月 26 日～9 月 1 日	バンコク、ナコンサワン、アユタヤ	5 名（ほか、文部科学省・ACCU から計 2 名随行）
2019 年 9 月 1 日～9 月 7 日	バンコク、カンチャナブリー	7 名（ほか、文部科学省・ACCU から計 2 名随行）

計 12 名

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム　実施報告書

2020 年 1 月

編集・発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　　(03)5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

ⓒ2020　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)